

報告Ⅱ

アーユス事業の特質：仏教者としてなすべきこと

特定非営利活動法人アーユス仏教国際協力ネットワーク理事長
茂田真澄

司会： 続きまして、茂田真澄先生のご報告に移りたいと思います。茂田先生の簡単なご紹介をさせていただきます。茂田真澄先生は大正大学の仏教学部をご卒業になりまして、1993年にNPO法人アーユス仏教国際協力ネットワークを設立なさいました。仏教や僧侶のあり方を問いながら国際協力や国内外の緊急支援、人権問題などに取り組んでおられます。現在はNPO法人アーユス仏教国際協力ネットワーク理事長の他に他組織での理事、評議員などを務めておられます。

それでは、茂田真澄先生による「アーユス事業の特質：仏教者としてなすべきこと」と題する報告をお願いいたします。先生、よろしくお願いします。

茂田： ただいまご紹介いただきました、アーユスの理事長をしております茂田真澄と申します。本来私もパワーポイントの準備をしておかなければいけなかったのですが、ちょっと今回のことを頼まれてから時間が経過している中で、いろいろなことをやっていて今日を迎えてしまったというのが本当のところでは。

いまタイトルで言われましたアーユスという組織を私がつくったそもそもの始まりは、ちょうどインドシナ難民の時代、多くの日本のNGOがタイ国とカンボジアとの国境で難民が出てきた中で大変だなということがありまして、その頃まだ私は大学を出て坊主にはなかったのですが、ぶらぶらしていたのですが、その時に先輩から言われて、街頭募金をしようということで東京のいろいろな町で街頭募金をしました。その時は、こういう格好ではなくて僧服を着て街頭に立ちました。ただ、そのとき私自身はカンボジアのことも何にも分かっていない。そういう中で街頭に立ちますと報道とかわずかな情報ですが、その中で多くの市民の方が募金をくださる。10円、20円の人がいれば、100円とか時々お札が入る時もあります。駅前なんかでやっていると数時間で10万円、20万円と集まるのです。だいたい3人1組でやるのですが、そうすると自分の所に4時間で7万円ぐらい1人に入ったりすると、何かすごく重く感じました。

その中で、中にはちょっと大きな金額を、5000円、1万円とかいう人もたまにありますと、「ほんとにこれ、届くんですか」と言われるのです。実際、私はそのとき責任者ではありませんが、でも、分かりませんとは言えないのです。それだけのことをみんなしてくださっているのです。「ええ。明日仲間が持っていくますので」という方便を言ってしまう。坊

主の性（さが）といいますか、そんなスタートでした。

実際に先輩から現地に行ってみようよという中で、私も1981年にカオイダンキャンプに行きました。そんな中で実はだめな自分と出会ったといいますか、そこに難民の人が、先ほど茅野さんの話で10万人とか言われましたが、それだけたくさんのカンボジアの人を見るのは生まれて初めてでした。野球場とかで5万人とかそういう人を見ることはあるかもしれませんが、初めての経験でした。そんな中で、何かしようと思っても暑い所でもありまして、何にも役に立たない自分と出会ったのです。

その時に日本から海外に来る、まだNGOという言葉も私は知りませんでしたので、ボランティアでしたが、そういう人たちが一生懸命、難民キャンプで活動をしているところに触れた時に「あ、これだ」と思ったのです。自分はそこにずっといるわけにはいきませんし、また日本に戻らなければいけないのが現実ですから、その時に自分にとっては何か仏教的に言うと光明を見たみたいな感じになったのです。

それで、日本に戻りまして、実はいくつかのNGOの会員になりました。JVCさんはじめ、シャンティさんもそうですけれども、いろいろな団体に関わるといいますか、それが当時の自分にとってはすごく新鮮だったのです。それで、カンボジアのこともいろいろなことが分かってきて、その時にカンボジアの難民キャンプにいる人たちの実態も分かってくるわけです。

ポルポトのこともカンボジアの中で虐殺が起こった。その被害者だけでなく、加害者側の人も難民として難民キャンプにいるのだということも分かってくる。自分がやっていることが、NGOを通して何か寄付するとか、そんなことしか最初はスタートできませんでしたが、これでいいのかなということと、それから、難民というだけで1日いくらのお金がもらえるというところや、その難民キャンプの側の村の人たちにはもっと貧しいタイの人などがいるという現実が分かってくるのです。

そういう中で何か矛盾といいますか、それから、自分の中で割り切れない、本当のことが少しずつ分かるうちに、なおさらどうしていいか分からなくなってくる現実に直面してきました。そのうちに今度は、日本国際ボランティアセンター（JVC）の人と、まだ当時、カンボジアには国交がありませんでしたから、ベトナムからカンボジアの国内に入りました。それがちょうど1982年です。

そうしますと、カンボジアの中で本当に多くの人々が虐殺されたキリングフィールドにも行きましたけれども、めちゃくちゃになったプノンペンだろうが、その周辺の村々もこんなに破壊されている中で一生懸命やっているカンボジアの国内の人たち、そこで活動しているNGOの人たち、それから、国連は当時はまだユニセフぐらいしか入っていませんでしたが、そういう人たちとつながるようになっていった時に自分がやるべきことが少しずつ見えてきた。自分が成長とまで言いませんけれども、何をすべきなのかが見えてきました。

それで、実際にNGOの人たちと付き合っていく中で分かってくるのが、実は自分以上にNGOの人たちのほうが仏教で言えば菩薩をやっているように神々しくも見えたのですが、実際に深く付き合っていくうちに足りない点とか、お金の問題とか、いろいろなNGOのそれぞれの団体の特色と、抱えている問題に直面するわけです。そういうのが関わっているいくつかの団体皆に大なり小なりありました。そのうちに自分がやるべきことという中で、アーユスという組織を今から20年前に作ることになりました。

それはただ自分の思いで作るのではなくて、まず、東京と大阪でNGOのいろいろな団体に集まっていたいただいて懇談会をしました。その中で私が当時言ったのは「NGOのためのNGOに自分たちはなります」ということでした。それで、いろいろなNGOに行ってみると、NGOの人たち、カンボジアのことをやっている人たちや、人権の問題のことをやっている人たちや、環境の問題のことをやっているとかいろいろなNGOがあるのですけれども、どこでも集会へ行くと同じ人たちにまた出会います。その時に、やはり大きな団体ではなくて、同じような人たちがそれぞれ自分とは違う問題にも関わっているなと思いました。そんな時に普通の人たちとつながっていないのではないかな。ちょっとオタクというか、いろいろな開発の関係のことをやっている専門書を持った人たちのグループがたくさんある中で、そういう人たちがやはり一般の市民と関係ないところとていいますか、それはちゃんとしたつながりではないなと。その時に、いや、これはお寺の人たち、お寺に来る信者さんとか、そういう方々が一般の人だというふうに考えた時にそことうまくつなげることができないか、ということです。

それから、いろいろな大きな社会で起こる震災とかいうこともそうですけれども、国際的な中東でのいろいろな問題とか、新聞に毎日出ていますが、それは日本の中での生活とつながっているようには一般の人はなかなか受けとっていません。そういうところと実はつながっていることをお寺がちゃんと伝えるべきだと思いました。それで、新聞の片寄った情報からではなくて、本当の海外の弱者の話を、NGOを通して正しく伝える中で市民と広くつながればとの思いでアーユスをつくっていくことにしたのです。

そして、それはすごくNGO側には喜ばれたのですが、実際活動するのはNGOの人たちなのですけれども、その人たちも、お坊さんだって霞を食べて生きていくわけではないですから、その人たちが責任を持って仕事をする時には給料をもらってちゃんと仕事をできるようにする。思いだけではできません。そんな中でアーユスはNGOの人たちの人件費の一部に協力しようという支援活動が中心の、NGOのためのNGOにしますということをNGO業界に宣言したのです。

その時に、実はその席にSVAの有馬さんがおいでになっていまして、「いや、それはとてもいいことだと思うんだけど、できたらそれだけじゃなくて、研究とか何かそういうほうにもお金集められないかな。君の得意なのはお金をうまく集めることだろうから」と何かちょっとのせられまして、その時に実は当時、ODAとNGOみたいな言い方の中で言うと、

今もそういうところがあるかもしれませんが、NGO側の人はODA批判をよくします。

ところが実は、ではNGOのプロジェクトを評価するものがないのではないかと。そんなことをアユスの中でできないかなと思いました。実はアユスをつくる時にいろいろな専門委員とうちの会で言っているのですが、何十人かの大学の先生など見識のある方々に無料ですけれどもメンバーに加わっていただいているのです。

そういう中で、それではそういう評価をすることをぜひやりましょうという声が出てきたのです。そして、1993年からつくって、1995年に『小規模社会開発プロジェクト評価』という本を作ることができました。ちょっと私には内容が難しすぎてよく理解できなかったというのが本音なのですが、ただそれが開発のことをやる大学生とかJICAとかの中ではすごく評価されたといいますか、よく買ってくださったといいますか、教科書に使っていただいたのです。

NGOも結果的に自己評価しないと手前みそでプロジェクトが終わってしまう。それから、先ほど茅野さんの話にあったように、現地の人たちが主役ですから、その時にNGOが改革運動をやったことによって逆効果になるとか、場合によっては方向を変えなければならないとか、場合によれば中止にしたほうがいいということもあるわけです。

ところが、手前みそでやっているようなところがあると、なかなか変えられない。問題点に気付かず、変わるのが難しい。そういうものを客観的に評価する、当時は指標すらなかったのです。そんなことをやっていくうちに、少しずつNGOのためのNGOというように自分自身も言えるようになったのではないかなと思っています。

そんなことをやっているうちに、今度の震災、阪神大震災の時もそうなのですが、ちょうど神戸で私が、震災が17日ですから、21日にばったり有馬さんと会って、「おう、何しに来たんだ？」と言われたので、「ちょっとお坊さんを集めて何かしようかと思っています」と。お坊さんにできることと言ったら、お葬式ですよ。

その時に地元の神戸には基督教の草地賢一さんという牧師さんがおられるのですが、その方と会って、よく来たなみたいな話から、いろいろなアドバイスをいただいて、もっとお坊さんを集めるためにプレスリリースをしたり活動前に行政の許可を取ったりしました。そんな中で1月いっぱい鶴越の火葬場でボランティア葬儀みたいなことをやりました。集まったお坊さんからお金が少しずつ集まる中でいろいろな避難所とか、そういうところで炊き出しが何かできないかということをやったりしたのが、先ほど震災のことを思いながらの中で頭をよぎって少しお話ししました。

そんな時にいろいろなボランティアの人たちと出合いをするのですけれども、なかなか継続ができないのです。プレスリリースとかそういうことをしたことによって、21日からスタートしたところ、翌日22日にはいろいろな宗派のお坊さんたちが50人、100人と日にちを追って増えてきたのです。ところが、炊き出しぐらいまではやってくださるのですけれども、長くはそれが続かない。

そうすると、結局こちらはその人たちの代表者でも何でもないので、バラバラでやっていく中で自分たちができる範囲というのは本当に限られてくる。そうすると、NGOみたいな組織をやはりそこで立ち上げられる人たちは続くのかもしれませんが、お坊さんたちの個人プレーでやるとなかなか長続きできない。そんな中で少しアユスとして仏教のためにというか、仏教界のために何かもうちょっとやらなければいけないことという中で、もうちょっとお坊さんたちをうまく組織に巻き込むようなことをいろいろ目論みました。

それと、お寺さんでいろいろ行なわれている行事、そういうところで普通の単なるいい話をする。うちの宗派にもお説教師さんという方がいるのですけれども、そういうのではなくてNGOの、ちょっとお坊さんばかりではないのですけれども、NGOの人たちをそこに登場させる。そこで日本の中でもいいですし、海外の問題でも何か本当の話を真剣に伝える。そういうことが話を聞いてくださる側の市民の人たちとか一般の人たちがそれを受けるといって、それによって何か心の眼を開くところにつながるのではないかなということも会のほうでは事業としてやっています。

先ほど桂先生からご質問がありましたが、アユスという組織の名前の理由を言いますと、実はご存じのように「命」という意味なのですが、そこから考えたのではなくて、うちの会はもう今は20年たちましたけれども、まだ後発でしたので、当時つける時に「A」から始まるとか「A」から始まるほうが何か代表の人を呼ぶ時には最初に呼ぶだろうというふうに考えたのです。

それだけの理由で何かいいのではないかなと言ったら、当時のスタッフでお坊さんではないのですけれども、「A」が付くものにしましょうと。「A」が付く中での仏教用語は何かないかと言ったら、「ああ、アユス」と、そんな簡単なことだったのです。でも、いい名前ができたなと当時、私自身も思いました。

それで、少しずつ組織の中の会員が増えていったというのではないのですけれども、実は当時、設立は1993年ですけれども、その半年前、私は今はお寺の住職なのですけれどもその頃は先代の住職がいて、すごく時間があつたのです。それで、1日200kmぐらいいろいろな所へ移動して、半年間で200人ぐらいの会員を集めました。その時に、会はまだ何もやっていないのです。大風呂敷なのです。ただ、法人会員5万円ということをお寺さんへ行って、門前払いもたくさんあつたのですけれども、話をさせてくれれば、まず、セールスではないのですけれども会員になってくれました。

そういうことをやっているうちに、設立当初の僧侶ばかりのメンバーでは、当然自分たちにお葬式だとか何かできると役に立たなくなりますからスタッフを雇うことになって、それから、事務所を置く所がということなのですけれども、そういうふうに考えていくと当然年間に2000万円、3000万円とか、4000万円ぐらいの資金が最初から必要になるわけです。それがどうかという、最初からそれが半年間の準備で出来上がったのです。そ

れは本気でやる気になればできるのだなと当初思いました。

ただ、実際にそれを維持するといった時には難しい事もありました。事業はもうやっているわけです。ところが、NGOのためのNGOというのはすごく分かりづらかったのです。学校をつくるとか、何かをするという具体的なことをやるのではないので説得力に欠ける、ということもありました。また、いろいろな団体に関わってきた中で、どのNGOにかかわっていくかというのはなかなか難しいということもあって説明が難しかったのです。

それから、アーユスをつくる前ですけれども、最初の湾岸戦争をやる年に、あの時も自分なりに考えて、中東のパレスチナに行ったりしたのです。パレスチナに行って宗教が本当に人間を幸せにするのかどうかという問題に出くわした時に、宗教戦争みたいに自分は最初は思っただけで行ったのですけれども、向こうのユダヤ教、キリスト教、イスラム教の人たちと話をすると、これは宗教戦争ではない、政治的な話だということを言われるわけです。

その中でますます分からない部分もあるのですけれども、そこに関わるようになっていくとやはり本当のことが知りたい部分と、そのカウンターパートになっている現地の団体と付き合っていくうちにやはりうちも組織が必要だなと思いました。それは教団の中にいろいろなことを説明して何か協力してもらおうということを青年会レベルで企画してやっていたのですけれども、なかなか執行部が変わることが多くて継続できないのです。継続は力というのは分かっているけども、継続できない。そんな組織はちょっと意味がないなと思ったのです。それで、自分で組織をつくったらどうだというふうになったのも大きいのです。

そうすると、当然、ただ思いが近い者だけで最初作っていますから、次々そういうことをやるといった時にすべて自分たちでやろうとすると、ちゃんとした責任ある仕事ができないだろうということで、既存のNGOを通してやるわけです。もう実際にやっている団体を通して。そうしているうちに、ただ、気持ちだけではなくて現地に行って本当のことを知るうちに、自分たちがやるべきことは、この日本の中で日本の国の一般の人たちが本当にいろいろな事を理解し、国に政策提言するようにすることが我々の仕事だなと思うようになりました。

アーユスを作ってから北朝鮮にも行ったり、そういうこともしている中で、先ほどCIAの話も出ましたが、自宅や事務所が盗聴とかされました。公安も来ました。それはイヤな感じもしますが、これが現実ですから、それで自分が何か反体制的なことをするわけではありませんから、それはしかたがないこととして対応はしております。

ただ、その時に何だかよく分からない国を支援しているのではなくて、弱者の人を考えて弱者に何をどうするのかという中での行動ですから、NGOとしての正しい行動がとれていると思いますし、それと、他の国から来ている同じように平和を願っている人たちとつながることが、すごく我々NGOとしてやるべきことだというふうにやればやるほど思っています。

それで、ちょっと話がまたそれですけども、憲法のことです。このことなんかは仏教系のNGOではあまりそういうことをやっているところは少ないのですけれども、実は、ご存じの方はこの中に多くいらっしゃると思うのですけれども、今の憲法が發布される時に日本の宗教団体全部に回って、仏教界の浄土宗だろうが、曹洞宗だろうが、そういうところにも回った時に、これは仏教精神の素晴らしい憲法だということを当時の仏教界のトップの方々が言われた。もう亡くなられました成田有恒先生、当時浄土宗の新総長だった方から直接その話を聞きまして、そんなに仏教の中で今の平和憲法が大切に思われていたのだということをその時に思ったのです。

では、そのことに対して仏教界が何をしているのかなというとなんかしていませんよね。そんな中で今アユスを作ってそうなのですが、教団と考えが違うことがあった時にこちらが何か言ってもうまくいかない時もある。そんな時も自分たちがやっていることを世の中にちゃんと伝えていく。そうすると、教団側がそういう平和のことに関しても真剣に取り組むようになる。こんな自分のキャラクターを表に出すことによって何か役に立てればというふうにずっと思っていて20年間活動してきました。

それと実際には簡単に憲法改正というわけにいかないでしょうけれども、日本人だけでも300万人の犠牲といいますか、亡くなってあの平和憲法ができているわけですから、それが一部の人たちによって、それは外国の力とかいろいろな力によってかもしれませんけれども、取り返しがつかない方向になったらやはり仏教者として情けないと思います。そこらへんは歴史を踏まえて、ちゃんと自分たちがやるべきことを別にNGOでなかろうが、お坊さんであつたら何かやるべきだなとすごく思っています。

何かとりとめのないむちゃくちゃな話をしてしまって申し訳なかったのですが、実際にこの後いろいろな方々と話ができれば、またいろいろな問題で話をしたいと思います。すみません、どうも失礼いたしました。